



こんにちは!

気象庁です!

12月号
平成17年
(2005年)



「海洋の健康診断表」の提供を開始しました

気象庁では、平成17年10月25日から地球環境に関連した海洋変動の現状と今後の見通しを総合的に診断し、その結果を「海洋の健康診断表」としてホームページなどで提供をしています。

海洋は、温室効果ガスである二酸化炭素を吸収したり、大量の熱を貯えることができることから、地球温暖化の進行を緩やかにしています。また、海洋変動は、台風の発生・発達や異常気象など気象とも深い関わりをもっています。

このように地球環境に密接な関連をもつ海洋の状況について、「海洋の健康診断表」では次の4つに分類してわかりやすく解説します。

- ①地球温暖化に関わる10年～100年程度の海面水温や海面水位、二酸化炭素濃度の変化など
- ②エルニーニョ現象や太平洋に存在する十年規模の変動、黒潮・親潮の長期変動など
- ③日本近海を含む北西太平洋の海面水温や海流、潮位、海氷の週～月程度の変動
- ④北西太平洋の海面浮遊物や海水中の重金属の状況

これらの項目ごとあるいは海域ごとに、海洋の状況について総合的に診断を加え、「今の状態は?」「いつもとどう違うの?」「これからどのように変化するの?」「地球環境にどんな影響があるの?」「その変動の原因は何?」といった疑問にこたえていくのが、「海洋の健康診断表」です。

「海洋の健康診断表」を通じて、あなたも地球環境の変化を実感してみてください。

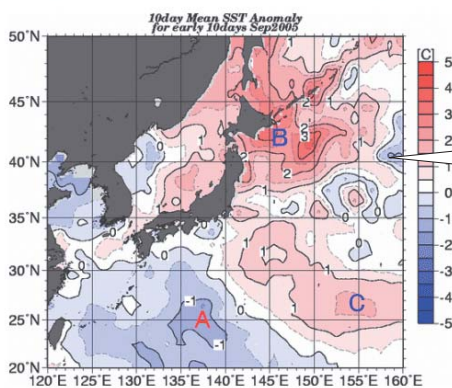
北西太平洋の海面水温分布

診断

9月上旬の北西太平洋の海面水温分布の診断は以下のとおりです。

台風14号の通過に伴い、日本の南や南西諸島周辺(図中A)では海面水温が平年より低くなりましたが、依然として、北海道周辺、日本海北部、本州東方では平年より2℃以上高い状態が続いています(図中B)。また日本の南東も平年より1℃以上高くなっています(図中C)。

海洋の状況について、わかりやすい診断結果



海洋の変化を的確に表現した図表

北西太平洋海面水温偏差分布(9月1日～10日平均)

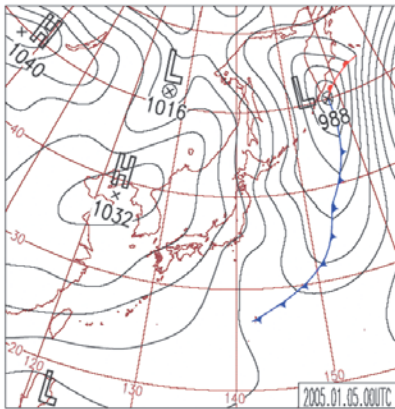
海面水温偏差とは、平年値(30年間の平均値)からの差で、正の値は平年より高いことを示しています。偏差は、図の右にある0.5℃毎のスケールと同じ色で色分けされています。



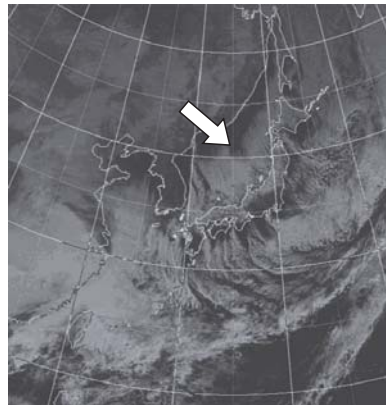
1月の気象

● ● ● 冬 日 ● ● ●

1月は、日本列島の西側のシベリア付近から高気圧が張り出し、東側のアリューシャン付近から低気圧があって、いわゆる西高東低の冬型の気圧配置となる日が多くなります。地上天気図では日本付近で等圧線が縦縞模様のようにほぼ南北に並び、気象衛星画像では日本海に寒気の吹き出しに伴う筋状の雲が見られます。このときの天気は、日本海側と太平洋側で明瞭に異なり、日本海側では雪や雨となりますが、太平洋側では乾燥した晴天となります。



地上天気図 2005年1月5日09時



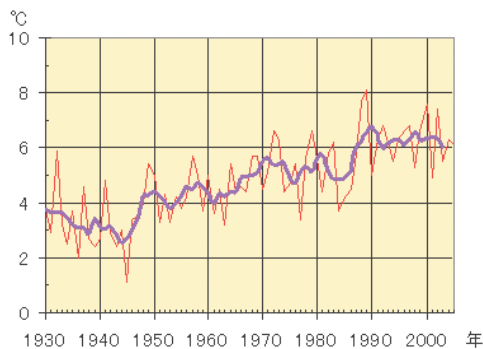
気象衛星の可視画像 2005年1月5日12時

1月は、日本の大部分の地点で最も寒い月となります。しかし、たとえば東京では最近の1月は昔ほど寒くなくなっています。

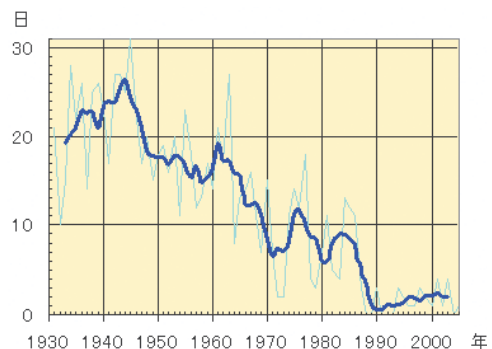
図は、1931年から2005年までの1月の東京の平均気温と冬日（最低気温が0℃未満の日）日数の経年変化です。図中の太い折れ線は、年々の変動を滑らかにしたものを示しています。

1月の東京の平均気温は上昇傾向を示しており、100年当たりの上昇量は+3.8度となっています。一方、1月の冬日日数は減少傾向を示し、近年は0～4日となり、めったに氷点下になりません。

このような気温上昇は、東京に限ったことではなく、札幌や仙台、名古屋、大阪、福岡など日本の主要な大都市で顕著に現れています。これは、自然な変動に加え、温室効果ガス濃度の増加に伴う地球温暖化の影響や、都市化が進行したことによるヒートアイランド現象が原因であると考えられます。



1月の東京の平均気温の経年変化



1月の東京の冬日日数の経年変化

発行 気象庁総務部総務課広報室

気象庁ホームページ <http://www.jma.go.jp/> にも掲載しています。